

平成 22 年 年頭所感

直江兼続の義の心を受け継いだ米沢の志士、雲井龍雄とは？

くさかり小児科 草刈章

医師会の皆様、明けましておめでとうございます。今年も宜しくお願いします。

昨年放送された NHK 大河ドラマ「天地人」は今までのシリーズで 3 位の高視聴率だったそうで、皆様もご覧になった方が多かったのではないかと思います。私も故郷米沢の上杉藩草創期の物語でしたので熱心に見ていましたが、多少美化された嫌いがあるのではないかと思われるところもありました。その一つに大阪夏の陣の千姫救出劇があります。通説では、関ヶ原の後に山口県津和野の藩主になった坂崎直盛（成正）になっています。嘘か誠か、この千姫救出に際し「千姫の命を救った者がいたら、彼女を嫁にやろう」と言う家康の約束だったにもかかわらず、千姫が坂崎直盛を嫌い、彼女は本多忠利と再婚することに。怒った坂崎直盛は輿入れの行列を襲撃し逮捕され、そして改易されたというものです。

天地人の第 46 回の放送では真田幸村が放った矢文を直江兼続が読んで、井戸から千姫を救出するということになっていましたが、あまりにあからさまな史実のねじ曲げはひいきの引き倒しという感じもしました。とは言うものの天地人の人気はものすごく、広報委員会の旅行で訪れた上越市の天地人博覧会は大型観光バスが何台もとまり、押すな押すなの盛況で 30 万人の来場者を数えたということです。

さて表題の件ですが、「天地人」を受け継いで平成 21 年 11 月 25 日に NHK から放送された「歴史ヒストリア；ただ人を助けたい、直江兼続と義の後継者達」が放送されました。この中で雲井龍雄は直江兼続が創立した禅林文庫を母体とする藩校興譲館に学び、詩魂豊かな秀才として知られ、幕末は薩摩軍の暴虐振りを激しく非難、奥州列藩同盟の理論的アジテーターとして活躍し、維新後は失業士族の救済活動に奔走、そして 27 歳で反政府活動の首謀者として逮捕され斬首されたというものです。地元では幕末から明治初期にかけて活躍した義士として知られていましたが、私は詳しくは分かっていませんでした。そこでこれを機会に少し調べましたので紹介します。

龍雄は弘化元年（1844）3月25日、米沢の袋町に住む藩士中島総右衛門の次男として生まれました。幼名は豹吉（ひょうきち）と名付けられ幼年時

代には猪吉、さらに権六（ごんろく）・熊蔵などと名前を替えましたが、18才の時、館山口町の藩士小島才助の養子となり、小島竜三郎と称しました。雲井龍雄という名は明治元年ごろから用いたもので、天下国家のために大いに働こうと意気盛んな25才のこと、「龍が天に昇る」という気概をもってつけた名であったと言われていました。

幼少のころは大変なきかん坊、町内であまねく知られた腕白坊主でしたが、ある日、父母が、「龍雄も12才になったのだから、もう少し腕白がおさまってくれるといいのだが」としみじみ語るのを、陰の部屋で聞いていた龍雄は、じっと考え込んでいましたが、『これほど父上母上に心配をかけるのは自分の過ちであった。これからは文武の道に励んで親に心配をかけないようにしよう』と決心し、それからは全く別人のようにおとなしくなり、ひたすら学問に励み、父母の言葉を素直に聞くようになりました。

14歳で藩校に入学、米沢にある書物は全て読み尽くしたといわれるほど読書をし、16才の時には学業優秀者として藩の重役の前で質問に答える栄誉を担うほどになりました。家では父母に孝行を尽したので17才の時藩から褒美をいただきました。小島家の養子となったのは18才の時のことでした。

20歳のときに養父の小島才助がなくなったのでその家督を継ぎ、22歳のときに江戸勤番となって米沢藩の江戸屋敷に務める一方、当時随一の大学者として有名であった安井息軒の三計塾に入門、たちまち頭角をあらわし、息軒先生の相談相手になるほどでしたが、藩命により1年程で米沢に戻りました。

龍雄は時局に明るいものとして藩内で重用され、江戸や上方の情勢が不穏なため軍備を整えること、京都に情報収集のための人材派遣を献策しました。慶応3年1月、米沢藩は千坂高雅・雲井龍雄・門屋道四郎らを京都に派遣し、中央の事情を探らせました。時に龍雄は24才、遠山翠と名を変え、天下の名士と交わり、時勢の推移を藩に報告していました。10月には徳川将軍慶喜が大政奉還し、12月には王政復古の大号令が発せられ、龍雄は貢士に挙げられました。貢士とは幕府に代わって政治をとることになった新政府に、全国各藩から推薦された議政官のことです。龍雄は米沢藩を代表して新政治に対する意見を述べる身分になったのです。

ここで龍雄の見たものは新政治を利用して自分の藩を優位に立たせよ

うと、徒に術策をつかう薩摩藩・長州藩などの醜い姿でした。こうして明けた慶応4年の正月は、3日に鳥羽伏見の戦いが始まり、6日には幕府軍が敗北して、将軍は江戸に帰りました。新政権は、大政を奉還してひたすら恭順を示す将軍を、あくまでも討伐しようとするのです。これは薩長が自らの勢力を強固にするために、幕府方をつぶそうとする企てと見られても仕方がないことだったのです。

正義感の強い純情の詩人龍雄は、諸外国が目をつけている日本の国内で、国家の政治が一部の藩の横暴によって内乱を招くことは許されないと考え、3回にわたって朝廷に意見書を差し出し、全国から有為の人物を集めて公正な政治が行われるように願ったのですが、一部の人に握りつぶされてしまい、そのうちに討幕軍が江戸に向かうことになりました。

4月11日、江戸城は開城されましたが、東征軍は、さらに幕府に味方した会津藩・庄内藩討伐しようとし、これを止めようとする奥羽地方の各藩（奥羽越列藩同盟、米沢、仙台、二本松など東北のほとんどの藩が参加）との間に戊辰の役がはじまりました。龍雄は、今こそ薩長を討つ時だとして、同盟軍を励まし、関東地方からも応援軍を集めようと努力しました。

しかし、時勢は龍雄の志に反し、9月22日、会津が落城して奥羽地方も平定されました。この年の9月8日には改元があり、明治元年と改められました。龍雄は米沢に謹慎し、明治2年6月、興譲館の先生に任命されて後輩の指導にあたりました。しかし、さらに遊学を志して東京に出ました。明治政府は龍雄を集議院議員にしました。当時、議員は任命によったのです。時に龍雄は26才でした。このころ、議員になった人々は後に高官となった人が多いことからみても天下の人材が集められたわけです。しかし、龍雄は、これらの議員を相手に堂々と議論しても一步も引きません。常に薩長中心の新政策をはげしく批判しましたので、集議院を追われる身となりました。

龍雄は、新政府が薩長に牛耳られないためには、力で向かうほかないと考えました。旧幕臣や脱藩者などが龍雄を慕って集まり、二寺に分宿するほど多くなりました。各地の人を集めれば五千人にもなろうかと思われました。明治政府は龍雄を恐れて米沢藩に幽閉を頼みましたが、さらに同志を次々に捕らえ、不穏な文書があるとして東京に護送させました。龍雄は深く取り調べられることもなく、明治3年12月28日、27才で小塚原刑場の

露となったのでした。

龍雄は死に臨んで、「私の方策が成功したならば日本の政治はもっとよくなるだろう。それのできなかつたのは天命である。」と言ひ、辞世の詩に「地上の一小物に過ぎない自分の体は滅んでも、正義の大志は永くこの世にとどまって天地の正気とともに生きつづけるであろう」と記しています。

今上天皇(この書の発刊は昭和63年のものであり、この時の今上天皇は昭和天皇のことです。)が皇太子の時、帝皇学を御進講申し上げた杉浦重剛は、ある日皇太子殿下に「人間の意思はかくあるべきでございましょう」と申し上げ、龍雄の「釈俊師を送る」と題した詩を、吟じてお聞かせした話は有名です。

米沢が生んだ明治維新の志士雲井龍雄の墓は米沢市城南五丁目(七軒町通り)常安寺にあります。

辞世の詩

死不畏死	死して死を畏 (おそ) れず
生不偷生	生きて生を偷 (ぬす) まず
男兒大節	男兒の大節は
光與日爭	光 (かがやき) 日と爭 (あらそ)
道之苟直	道 之 (これ) 苟 (いやし) くも直 (なお) くんば
不憚鼎烹	鼎烹 (ていほう) を憚 (はばか) らず
眇然一身	眇然 (べうぜん) たる一身なれど
萬里長城	万里の長城たらん

口語訳

自分は、死ぬに際して死をおそれない
まして意味も無く生きながらえようとも思わない
男子の大儀というものは
太陽の輝きにも負けぬくらい輝かしいものである
もし自分が信じている道が正しいのであれば
釜茹でになってもかまわない
とるに足らないこの身ではあるが
わが心は万里の長城となりこの国の行く先を守るであろう。

(以上、米沢児童文化協会編 『郷土に光をかかげた人々』)

<http://www8.ocn.ne.jp/~yozan/rekisi/kumoi.html>、

雲井龍雄 辞世の句 <http://www.marinenet.co.jp/jinpati/lastsong/tatuo.htm>
から引用しました。)